

後 iPTH182 まで低下するも血中 Ca13 と高値であった。PEIT 施行後、血中 Ca10.9 まで低下した。

【結語】PEIT は簡易的にでき移植後の高 Ca 血症には効果的と思われた。

## II. 特 別 講 演

### 腎不全と骨・ミネラル代謝

#### ～CKD-MBD という概念～

東海大学医学部内科系

腎内分泌代謝内科学

深川 雅史

## 第 25 回新潟周産母子研究会

日 時 平成 25 年 7 月 27 日 (土)

午後 1 時 30 分～5 時 10 分

会 場 新潟大学医歯学総合病院 12 階  
大会議室

### I. 一 般 演 題

#### 1 出生前診断された副腎部嚢胞性腫瘍の 2 例に対する治療経験

仲谷 健吾・窪田 正幸・奥山 直樹  
佐藤佳奈子・荒井 勇樹・大山 俊之  
横田 直樹

新潟大学医歯学総合病院小児外科

〔症例 1〕36 週の胎児エコーで 3cm 大の右腹部腫瘍を指摘。MIBG シンチで腫瘍辺縁に集積あり、12 生日に右副腎腫瘍を摘出。神経芽腫と病理診断され、外来経過観察中。

〔症例 2〕40 週の胎児エコーで 3cm 大の左腹部腫瘍を指摘。その後、15mm 大の病変を右副腎領域にも認めた。MIBG シンチでは集積なく、副腎出血としてエコーで経過観察し、嚢胞は縮小傾向。

2 疾患の鑑別と治療方針につき、文献的考察を加え報告する。

#### 2 胎児診断・予定帝王切開後、日齢 1 に手術した胎便性腹膜炎の 1 例

内山 昌則・村田 大樹・齊藤 朋子\*  
倉辻 言\*・丸橋 敏宏\*\*・大野 正文\*\*  
有波 良成\*\*

県立中央病院小児外科  
同 小児科\*  
同 産婦人科\*\*

胎児診断された胎便性腹膜炎に対し、帝王切開・挿管呼吸管理後、一期的に偽嚢胞切除・腸部分切除・回腸一回腸吻合術を行い、経過良好な症

例を報告する。

33週産院にて羊水過多と胎児の腸拡張を認め34週に産婦人科を受診。胎児に腸管拡張と腹部腫瘤を認め胎便性腹膜炎と考え、37週6日に帝王切開。体重2738g。石灰化を伴う嚢胞・回腸拡張を認め、注腸でマイクロコロソあり回腸閉鎖症・胎便性腹膜炎と診断し日齢1に開腹手術した。

### 3 Intestinal neuronal dysplasia (IND) と呼ぶべき病理組織像を呈した極低出生体重児の1例

平山 裕・飯沼 泰史・小松崎尚子  
飯田 久貴・新田 幸壽

新潟市民病院小児外科

症例は0歳女児。在胎27週、1124gで出生後、哺乳と自排便は可能であったが腹満あり。生後2ヶ月より腹満増強したが病型診断には至らず回盲部病変を疑って試験開腹した。腸管には通過障害や口径差を認めず虫垂生検も正常だった。経肛門的洗腸チューブで減圧管理しながら成熟を待った所、生後5ヶ月頃から腹部は正常化した。しかし直腸粘膜生検ではINDの組織像を呈し、消化管の成熟性を考える上で示唆に富む症例と言えた。

### 4 肥厚性幽門狭窄症に対し硫酸アトロピン・ニトログリセリン併用療法が奏功した18トリソミーの1例

小野塚淳哉・楡井 淳・小林 玲  
沼田 修・皆川 雄介\*・澤野堅太郎\*  
下妻 大毅\*・仁田原康利\*・大橋 伯\*  
遠藤 彦聖\*・田中 篤\*

長岡赤十字病院新生児科  
同 小児科\*

症例は在胎40週3日、出生体重1684g、男。染色体検査で18トリソミーと診断した。肥厚性幽門狭窄症(HPS)を発症し、硫酸アトロピン・ニ

トログリセリン(NTG)併用療法で軽快した。NTGによる有害事象はみられなかった。

【考察】18トリソミー等の先天異常を有する児に合併したHPSに対し硫酸アトロピン・NTG併用投与療法を行った報告はない。手術治療を選択しづらい場合に本療法を試みるべきである。

### 5 プロカルシトニン高値を認めた超低出生体重児の1例

斎藤 朋子・齋藤 七穂・水流 宏文  
額賀 愛・林 雅子・塚田 正範  
倉辻 言・丸山 茂・須田 昌司

県立中央病院小児科

症例は在胎26週5日、出生体重860gの女児。母体前期破水後12日目に緊急帝王切開で出生し、抗生剤予防投与を開始した。日齢1の検査でWBC 103,200/ $\mu$ l, CRP 1.1 mg/dl, プロカルシトニン > 100ng/mlと高値であった。臨床症状から重症感染症は考え難く経過観察し、プロカルシトニンが0.5 ng/ml以下になるまで計7日間抗生剤を継続した。新生児におけるプロカルシトニンの臨床での活用について調べた。

### 6 当院における胎便関連性イレウスを発症した新生児の検討

山崎 肇・永山 善久・大石 昌典  
佐藤 尚・鳥越 司

新潟市民病院総合周産期母子医療センター  
新生児内科

胎便関連性イレウスを発症した新生児の臨床経過を検討した。2008年1月～2013年5月に経験した15名(男/女; 6/9名、在胎週数24～36、中央値31週、出生体重636～1644、1038±333g)を対象とした。86.7% (13/15)が胎児期の発育障害を呈していた。14例にガストログラフィンの胃内投与および注腸が行われたが、1例は緊急手術を施行した。重症例は、消化管穿孔を